

キリストの御体を食べ御血を飲むよう差し出されることの真意

ブレンダン・ラヴェット著

本稿はアイリッシュ・タイムズ紙（2012年6月26日付）掲載。ラヴェット神父はフィリピン、ケソン市のインスティテュート・オブ・フォーメーション・アンド・リリジヤス・スタディーズ（IFRS：信仰教育・宗教研究のための研究所）で教鞭を取っている。

聖餐と理由 「これは確かに厳しい物言いだ...。」ヨハネ福音書6章51－59節の状況から生じるこうした反応が、多くの者にとって分かれ目となった。弟子の中にはすでにイエスに感化され彼について行くことを決めた者もいた。そしてイエスを信頼していた彼らはその肉を食べるようという奇妙な申入れを、いつか将来理解する時があると待望する気持ちだった。

では何がこの言い方を厳しいものにするのか。それと関係するのは、どの程度までこれを隠喩として、あるいは象徴として読まないでいられるかということである。研究者の多くはこの言葉のもつまったくの肉体的物性的問題に注目してきた。レイモンド・ブラウンはその注釈書『ヨハネによる福音書』の中で、「四番目の福音書はユダヤ人の感情にまったく妥協せず、御子の肉と血の現実を断固として主張する」（原著283ページ）と指摘する。

われわれの遡れる限りにおいて、キリスト運動は布教伝道活動として理解されている。そこには人間を引きつけ、あらゆる文化境界線を越えるものとしての語られるべき何かーまたは実現されるべき何か、とする方がよいだろうーがある。

最後の晩餐の古代キリスト教の伝統ではイエスの行いが、契約によって一つの民族を形作るという明確な神の活動に連続しているとみる。旧約聖書の最古層の視点でも、神は「ある民族」を形成すると理解されている。神は酷く搾取された人々の泣き叫ぶ声を聞きとどけ、彼らを「一つの民族」と為す。キリスト教の伝統は「契約」という言葉を物語に導入し、この比類ない神の行為がイエスから発せられるとする。われわれの人間性をイエスが再び建て直すことを経験することにおいてこそ、そしてそれを通してこそ、イエスは何者かがわかるようになる。これまで思いもつかなかった方法でわれわれの人間性に気付くようになるという経験が、信仰によってイエスを認めるために不可欠である。コリント人への第一の手紙の御体についての議論の根底にあり、ローマ人への手紙の結びの数章で詳細に述べられるのは、キリスト者の互いの関係は「作り上げる」関係であるというパウロの信念である。われわれは互いの人間性を築く中でキリストに与っている。これはヨハネ福音書13章につながっている。

ここで語られるのは、「主である」イエスのうちへとわれわれが成長することで、互いの足を洗うことができるようになるということである。足を洗える、つまり、同じ食卓につく大事な客として迎え入れることである。

このことはわれわれの作ってきた世界と単純につながるものだと、新約聖書は新しい創造、イエスの御血による新しい契約について述べつつわれわれに考えさせようとしているのではない。それどころかわれわれの築いた世界は、神の世界と神が愛する人々に神のもたらそうとする未来を進んで受け入れるようというイエスの招きに対して、人を殺すような暴力をもって向かっている（ルカ4章28－29節）。

イエスの出来事が神の行為であると把握するためには、共同体はまずその独自性と分離性

を理解しなければならない。それはもちろん人類からの分離ではない。そうするとポイントをはずしてしまう。

むしろ、その範囲が人類のために不十分なすべての共同体や親縁関係からの分離である。このような新しいやり方でわれわれの人間性を悟ることは、すでに存在する社会構造に基づくものではなく、まったくの人間性、同じように被造物であること、成長してキリストに似たものとなることができるという共通の能力に基づいている。

われわれは最後の晩餐との関係でミサ聖祭について考えるくせがついているが、さらに大きなミサ聖祭のテーマがあり、それがこの世でイエスが成立させた福音の御体と御血の物語と同じように広がっている。このイエスによるミサ聖祭のあり方のテーマは、イエスの、神が恵みとされたあらゆる者を受け入れ、恵みに感謝するイエスの実践を指している。イエスは他のために感謝を奉げる。彼らはイエスにとっての贈り物だからである。

より深いレベルの人間性、つまり人間的なもののかげらをすべて包含するような関係性のレベルを要求されれば、われわれはたやすく苛立ち、怒り、危険な状態になる。だがこのチャレンジは、はかりしれない愛の経験によってのみ生じるのだから、われわれはまだ、「世の命のための私の体」というイエス御自身の言葉に答えられるまでにはなっていないのかもしれない。